

酒田市制施行50周年記念

押絵展

—江戸～現代—

一階城輪柵跡展

展示資料目録



歌舞伎絵 (牛若と浄瑠璃姫)

開催期間/1983年5月11日～6月26日

開館時間/9時30分～16時30分

休館日/月曜日・祝日

入館料/大人100円・児童生徒50円

酒田市立資料館

酒田市一番町8-16 TEL (24) 6544

押絵とは

「押す」とは「貼る」の意味で、「押絵」とは「貼る絵」のことである。

金襴（キンラン）、紗（シャ）、綾（アヤ）、縮緬（チリメン）などの布地を厚紙で細工をし、まとまった絵とするもので、はじめは、きれや紙を切って貼ったが、後には厚紙をきれで包んだり、さらには浮きあがらせるために綿をふくませて貼りあげるのが、一般的になった。

（参考 弘文館発行「日本風俗史事典」）



恵比須・大黒

押絵のおこり

押絵は当地方では置絵おきえとも呼ばれていますが、その起源は奈良時代ころに中国より入ってきたといわれております。

京都大阪の上流社会で流行し、その後江戸時代に、江戸諸大名の大奥の婦人から一般人の間に普及してきた。

安永年間（西暦1772～）ころから押絵と呼ばれるようになりその以前は衣裳人形とか衣裳絵といわれていた。

江戸時代から明治、大正、昭和初期には婦人の手芸として盛んに行われ、社寺に押絵の額や絵馬が奉納されたり、竹串をつけた雛人形や風俗人形、さらには羽子板、灯籠、箸入れ、紙入れ、小箱など広く応用された。

その後、西洋式の手芸が入ったことや太平洋戦争の影響を受けたりして作られなくなったが、最近、婦人の間に見直されてきている。

（参考 山田徳兵衛著「新編日本人形史」ほか）



歌仙絵



源氏絵

押絵と羽子板

押絵の羽子板が見られるようになったのは江戸中期の文化・文政時代のころからであるが、そのころは人物だけの押絵で、背景は筆で絵をえがいた。

板の全面に押絵が見られるようになったのは、明治以降で、歌舞伎俳優の舞台姿を押絵にしたことにより、女性の人気を博して、今日でも浅草観音などの年末に行われる羽子板市はにぎわっている。

(参考 山田徳兵衛著「新編日本人形史」)



羽子板